

専門領域別企画 | 専門領域別：【合同】体育経営管理・体育社会学

Ⓖ 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 11:40 Ⓖ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[1a101-03] 体育経営管理・体育社会学合同シンポジウム／部活動地域展開後の学校教育・体育を再考するーレーゾンドートルと事業構造ー

コーディネーター:清水 紀宏(筑波大学)

現在進行中の学校（運動）部活動地域展開政策は、明治期以来、長年わが国の学校教育／体育の一翼を担ってきた課外活動のトップダウン手法による強制的な縮小・廃止策でもある。しかも、教員の「働き方改革」と子どもの「少子化」という重大な社会変化への対応要請を受けた「後戻りできない」改革でもあり、新しいスポーツシステムへの本格的な改変に否が応でも向かわざるを得ないのが現況である。

こうした体育・スポーツ界全体への大きな影響を予想させる地域展開策を契機に、学校運動部に対する社会的・学術的関心も急速に再燃している。また特に、本シンポジウムを合同で企画した体育社会学及び体育経営管理専門領域では、ここ数年、運動部活動問題について様々な角度から、継続的に議論の対象としてきた。しかしその多くは、地域展開・地域移行をめぐる現状分析（効果や弊害の検証）をベースにした地域社会への円滑かつ有益な受け皿づくりに焦点化されている。即ち、部活動の地域展開に対する研究者・研究団体の目線は、営利・非営利団体による「地域スポーツ」の協同統治（ガバナンス）の構築に向かっている。

そこで本シンポジウムでは、部活動縮小・廃止という歴史的改革もたらす「学校教育・体育」への広範なインパクトに焦点を当て、新たな学校像及び事業構造（教科内・教科外・課外）への変容、学校体育の存在意義の再検討、保健体育教師の養成（志望者の確保）・採用・研修・職業生活への影響等々の角度から学際的に議論する。

[経・社-S-1]

「これからの学校像」からみた学校教育／体育の再編

*本田 由紀¹ (1. 東京大学)

[経・社-S-2]

学校体育のレーゾンドートルを「再び」問う

*松田 恵示^{1,2} (1. 神戸親和大学、2. 立教大学)

[経・社-S-3]

部活動地域展開がもたらす保健体育教師へのインパクト

*野崎 武司¹ (1. 香川大学名誉教授)

専門領域別企画 | 専門領域別：【合同】体育経営管理・体育社会学

⌚ 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 11:40 皿 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[1a101-03] 体育経営管理・体育社会学合同シンポジウム／部活動地域展開後の学校教育・体育を再考するーレーゾンデートルと事業構造ー

コーディネーター:清水 紀宏(筑波大学)

[経・社-S-1] 「これからの学校像」からみた学校教育／体育の再編*本田 由紀¹ (1. 東京大学)**<演者略歴>**

東京大学大学院教育学研究科教授、日本学術会議連携会員。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。博士（教育学）。日本労働研究機構研究員、東京大学社会科学研究所助教授等を経て、2008年より現職。専門は教育社会学。教育・仕事・家族という3つの社会領域間の関係に関する実証研究を主として行う。

日本の教育は垂直的序列化と水平的画一化が浸透している現状にある。前者は「学力」や「主体性」等による優劣の軸で児童生徒を評価する視線の充満を意味し、後者は特定の「態度」や人間像を望ましいものとして要請する圧力の充満を意味する。これらは児童生徒の出身家庭の諸資源による格差や排除を生み出すという点でも問題であり、また急増する不登校やいじめ、自殺などの要因ともなっている。これらの陰で、過少になっているのが水平的多様化、すなわち個々の児童生徒の特性や意思、感情などを尊重した自由度が高くきめ細かい学習のあり方である。水平的多様化は、単元別自由進度学習や探究学習において部分的に導入されつつある。

こうした現状理解を体育に当てはめるならば、体育もまた身体能力に基づく序列化・競争や、一斉行動および積極性の要請など教育全般の問題性を色濃く反映しており、ジェンダーとも絡み合いながら「体育嫌い」を生み出していることが指摘されている。個々の児童生徒の身体性の尊重、様々な形態で体を動かす楽しさなど、水平的多様性を取り入れたこれからの体育のあり方を実現してゆくためにはいかなる条件が必要かについて考察する。

専門領域別企画 | 専門領域別：【合同】体育経営管理・体育社会学

⌚ 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 11:40 🏠 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[1a101-03] 体育経営管理・体育社会学合同シンポジウム／部活動地域展開後の学校教育・体育を再考するーレーゾンドートルと事業構造ー

コーディネーター:清水 紀宏(筑波大学)

[経・社-S-2] 学校体育のレーゾンドートルを「再び」問う*松田 恵示^{1,2} (1. 神戸親和大学、2. 立教大学)

<演者略歴>

大手前女子大学、岡山大学、東京学芸大学を経て、現在、神戸親和大学、立教大学に在職。専門は、スポーツ社会学、文化社会学。教育政策、教員養成政策、体育科教育の領域においても実践的な研究と活動を行っている。

「体育」と「学校」という教育的営みや制度の社会的評価は、常に、背景となる社会の状況との関係でなされてきた。第二次世界大戦後の日本、高度経済成長期の日本、成熟期から「失われた30年」を経た日本、そして高度情報化社会と少子高齢社会の日本など、概観すれば、そうした社会背景、ないしは広く社会構造の変化に応じて「体育」や「学校」という概念とその在り方が結局のところ結晶化している。他方で、民間の教育研究団体や学術研究が現場において切磋琢磨する実践開発から、行政主導のものと実践開発へと、大きくその発展の仕方がトレンドとして変化しつつある。また、人工知能に代表される社会構造の抜本的な変化を予見させるテクノロジーの日常化や科学技術の現代的進歩は、「体育」や「授業」という営みをより脱神格化させ民主化する反面、経験として蓄積されてきた価値や制度が問い直されないままに過去のものへと思惑停止の中でオミットされることも起こっている。社会/教育/学校というベクトルではなく、遊び/スポーツ/ウエルビーイングというベクトルの中で「体育」の価値と制度を問い直したとすれば、今、有用な視座は多彩な「壁」を超える思考とか、「循環」という観点からなされる複眼性や動的認識の中に見出すことができるのではないか。そしてそれは、新しい意味での身体、あるいは「現代的な身体」の問題をめぐることにならざるをえないのではないか。より具体のレベルで、当日考えてみたい。

専門領域別企画 | 専門領域別：【合同】体育経営管理・体育社会学

Ⓖ 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 11:40 Ⓖ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[1a101-03] 体育経営管理・体育社会学合同シンポジウム／部活動地域展開後の学校教育・体育を再考するーレーゾンデートルと事業構造ー

コーディネーター:清水 紀宏(筑波大学)

[経・社-S-3] 部活動地域展開がもたらす保健体育教師へのインパクト*野崎 武司¹(1. 香川大学名誉教授)**<演者略歴>**

筑波大学大学院体育研究科体育経営学研究室修了後、香川大学教育学部、教職大学院高度教職実践専攻にて教鞭をとる。附属高松中学校校長、教育学部長、香川大学教育担当理事を歴任。最近は、体育・スポーツ研究から離れ、教職研究に従事してきた。

筆者に課されている課題は、学校部活動の地域展開がもたらす保健体育教師へのインパクトである。そのイメージを捉えるには、まず地域移行・地域展開の実態に触れる必要がある。今回は、東京都品川区（部活動は学校教育の一環）、茨城県土浦市（学校教員主導の地域展開）、長野県長野市（部活動を学校教育から分離）の三つの事例の改革の経緯を調査した。様々に相違はありながら、「部活動という価値ある重たいものを存続・発展させるための地域移行・地域展開だ!」という、改革推進の中で培われたビジョンについては共通していると感じた。この7月で地域移行を整えるという長野市においても、「今後の状況を捉え、部活動の今後のあり方、学校・教員のあり方を見直す機会としての時間があると思う」という声があった。現時点で、地域移行・地域展開後の状況を明確に捉えることはできないと言っている。

筆者の理論的立場は、コミュニケーションが<自己>と<世界>を産出する、というものである。加えて、ある強固な世界の見え方がある場合、そこにはそれを生み出す「語り口・語られ方」の堆積ともいべきディスコース（言説）が存在することとなる。今回は、学校部活動を支えてきたディスコース（例えば「部活がしっかりしていると、学校は落ち着く」、「学校教員は、部活だけでなく、教室での様子や行事などの様々な場面での子どもの様子をトータルに見て、教育に生かしている」、「競技成績ばかりでなく、子どもが中学生として成長することが第一だ、と考えるような、そんな外部指導者に、部活動の面倒を見てほしい」、「現在の部活改革は子どものことを後回しにしている」等）とその背景を捉え、その揺らぎの状況（＝地域移行・地域展開が齎す保健体育教師へのインパクト）を、改革の関係者との対話の中で探ってみたい。